

企画展示「大収蔵資料展」の広報効果と展示評価

川瀬裕司

千葉県立中央博物館分館海の博物館
〒299-5242 千葉県勝浦市吉尾 123
E-mail: kawase@chiba-muse.or.jp

要 旨 これまでに海の博物館で収集してきた大小さまざまな標本や映像資料で紹介する企画展示「大収蔵資料展」(2009 年開催)において、会場内に設置したアンケートにより広報効果と展示内容に対する評価を明らかにした。この企画展示を知った情報源として、海の博物館のホームページ、通路に掲示したポスターや各地で配布したちらしが挙げられたが、来館して知ったという回答が過半数を超えた。展示のテーマ・わかり易さ・内容に対して、いずれもポジティブな評価が 8 割近くを占め、年齢や来館回数による差はみられなかった。人気が高かった展示は、ダイオウイカやエチゼンクラゲ、マッコウクジラの顎骨などの大型標本で、その理由として実物の大きさをあげた回答者が多かった。

キーワード: 博物館資料, 房総半島, 海洋生物, アンケート, マーケティング。

千葉県立中央博物館は自然誌系を中心とした総合博物館で、1989 年に千葉市に設置された。この中央博物館の海における野外活動を補完する施設として、分館海の博物館が 1999 年に勝浦市に設置された。海の博物館では、房総半島をはじめ全国各地で海の生物や自然環境に関する資料の収集や調査研究が行われており、これらの活動によって得られた資料や新たな知見は、展示や教育普及活動を通して一般の人々に広く知ってもらう機会を提供している。

海の博物館の展示エリア全体(通路等も含む)の床面積は 790 m²で、建物の総床面積(3,919 m²)に占める割合は 20.2%である。展示エリアには、展示室、ロビー、研修室の 3 つがある。展示室(床面積 342 m²)には、千葉県の海と自然をテーマとした常設展示があり、4 つのエリアから構成されている。すなわち、房総全体の海を紹介する「房総の海」、房総各地の海の特徴を紹介する「さまざまな海の姿」、海の博物館の周りの海を紹介する「博物館をとりまく自然」、そして展示室とフィールドの橋渡しをする「海と遊ぼう」である。一部の展示はユニット化されており、季節などに応じて別のユニットに交換して展示にバリエーションを持たせる工夫がされている。展示室に隣接するロビー(床面積 169 m²)には、海の生きものや自然に関する図書が設置されており、来館者がフィールドへ出る前後に学習できるようになっている。ロビーを隔てて展示室と反対側には、研修室(床面積 121 m²)がある。ふだんは、房総の海と博物館周辺の海を紹介する 2 本の映像が大型スクリーンで定時上映されているが、研究会や企画展示など様々な用途で使用できるようになっている。

海の博物館では、さまざまなタイプの企画展示が開催されている。研究員の専門分野に関連したテーマで海の生物や自然環境などについて詳しく紹介するマリンサイエンスギャラリーや、海の博物館に収蔵されている資料の一部を公開する収蔵資料展のほか、他機関と合同で実施する展示などが挙げられる。収蔵資料展では、これまでにイッカク *Monodon monoceros* (北極海に生息するクジラの仲間)の全身骨格標本(平成 15 年度, 17 年度)、貝類の乾燥標本(平成 18 年度)や海鳥の剥製標本(平成 20 年度)を公開してきた。

企画展示の開催中には、アンケート用紙を会場に設置して回答者の基本情報と展示の感想を毎回収集して、集計結果を海の博物館で毎年発行しているニュースレター「いそび通信」で公表してきた。本報告では、平成 21 年度に開催した収蔵資料展「大収蔵資料展-大きなモノから小さなモノまで」の展示内容と広報の方法について紹介し、アンケート結果を分析して広報効果と展示内容に対する来館回数・年齢別評価について明らかにした。

展示内容

千葉県立中央博物館分館海の博物館では、平成 21 年度収蔵資料展「大収蔵資料展-大きなモノから小さなモノまで」を、2009 年 7 月 18 日から 9 月 27 日までの休館日を除く合計 67 日間、研修室を会場として開催した。この企画展示では、海の博物館の開館 10 周年を記念して、これまでに収集・登録されてきた 55,678 点(2009 年 3 月末現在)の資料等の中から、大小さまざまなモノ(標本)とモノでないもの(映像資料)を

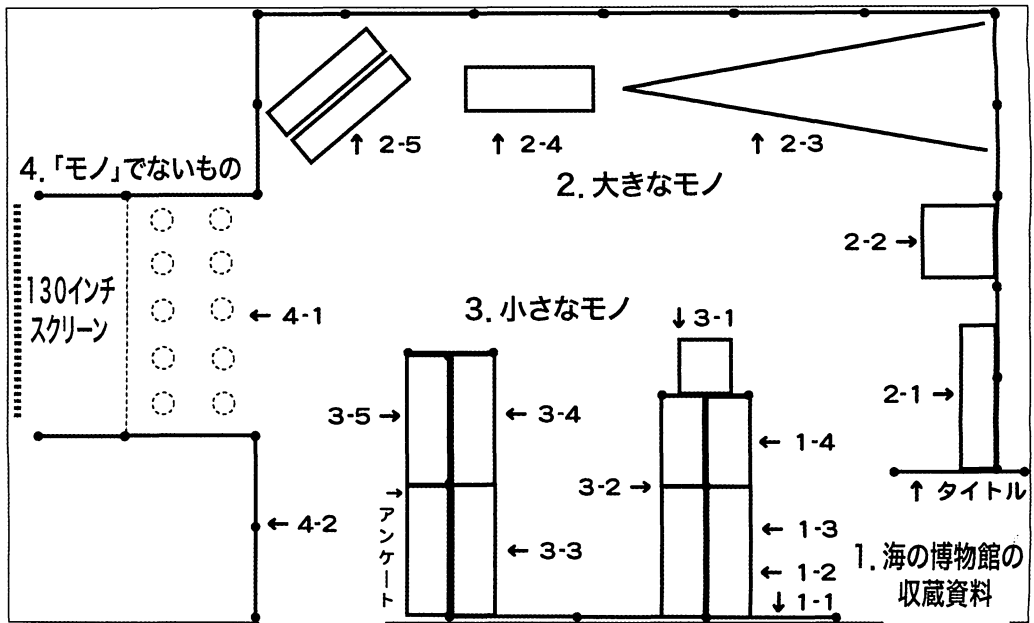


図1. 大収蔵資料展の平面図。黒点間の線はパーティションを示し、長い線は1.8 m、短い線は1.2 m。四角形は展示台。

表1. 「大収蔵資料展」の展示項目と主な展示資料および資料形態。

大項目	小項目	主な展示資料	主な資料形態	図2の写真
1 海の博物館の収蔵資料	1-1 収蔵資料とその役割	資料の意義	パネル	B
	1-2 どのように資料を収集する？	資料収集のようす	写真資料	C
	1-3 どのように資料を整理・登録する？	乾燥標本の例	乾燥標本	C
	1-4 どのように資料を保管する？	液浸標本、写真資料、動画資料の例	液浸標本等	D
2 大きなモノ	2-1 千葉県房浦沖で漁獲されたメカジキ	メカジキ	液浸標本	E
	2-2 巨大なクラゲ	エチゼンクラゲ	液浸標本	F
	2-3 最大のハクジラ	マッコウクジラ（下顎骨）	乾燥標本	G
	2-4 最大級の無脊椎動物	ダイオウイカ	液浸標本	H
	2-5 「鯨」でないサメ	カラチョウザメ	乾燥標本	I
3 小さなモノ	3-1 温帯域にやってくる熱帯性魚類	セグロチョウチョウウオ	生体	J
	3-2 微小貝を採集する	ミジンワダチガイ	乾燥標本	K,L
	3-3 雌雄同体の動物たち	ヒラムシの一種	動画資料	M
	3-4 研究に使用された収蔵資料	アカホシカクレエビ	液浸標本	N
	3-5 植物資料	アマノリ的一种	生体	O
4 「モノ」でないもの	4-1 海の博物館の動画資料	千葉県各地の海洋生物と生息環境	動画資料	P
	4-2 海の博物館の写真資料	海洋生物の生態・標本写真	写真資料	Q

選りすぐって公開した。なお、サブタイトルはある企業の有名な宣伝歌の歌詞の一部をなぞらえることにより、展示への関心を引きつける効果も期待した。

展示は4つの大項目と16の小項目で構成した（図1, 2, 表1）。

1つめの大項目は、「海の博物館の収蔵資料」である。小項目1-1（図2B）では、海の博物館で収集の対象としている資料とその意義について解説した。

小項目1-2, 3, 4（図2C, D）では、資料の収集・整理・登録・保管方法について紹介写真で紹介するとともに、



図2. 大収蔵資料展の各項目における展示状況. 会場への入口の様子 (A), 出口の手前に設置したアンケート (R), その他の配置と内容は, 図1と表1および本文を参照.

さまざまな形で保管されている資料（液浸・乾燥標本、写真・動画資料）を実物で紹介した。なお、博物館資料の整理・保管が行われている現場を来館者に実際に見ていただくために、収蔵庫見学ツアー（1回30分、合計6回、参加者合計37名）を会期中に実施した。

2つめの大項目は、「大きなモノ」である。ここでは、これまでに海の博物館で収集した資料のうち、大型標本を紹介した。

小項目 2-1(図 2E) は、メカジキ *Xiphias gladius* (全長 1.2 m) の液浸標本である。メカジキはマカジキとならび千葉県勝浦市に水揚げされる代表的な魚類で、この個体は 2008 年 12 月に地元の漁業者から提供されたものである。

小項目 2-2(図 2F) は、エチゼンクラゲ *Nemopilema nomurai* (傘径約 80 cm) の液浸標本である。エチゼンクラゲは年によって日本海側で大発生し、近年太平洋側でも確認されるようになった。この個体は 2002 年 12 月に勝浦市沿岸に出現したもので、採集直後の生体映像と併せて展示した。

小項目 2-3(図 2G) は、マッコウクジラ *Physeter macrocephalus* の下顎骨(長さ 4.9m)である。これは 2003 年 12 月に千葉県千倉町(現南房総市)の海岸に座礁した全長 17.6m の雌個体の下顎骨で、白骨化させるためにいったん海岸に埋葬したあと再び掘り起こす作業を行っている写真とともに展示した。

小項目 2-4(図 2H) は、ダイオウイカ *Architeuthis japonica* (全長 2.7m) の液浸標本である。これは 2007 年 1 月に山口県長門市に漂着した個体で、萩博物館から提供されたものである。ダイオウイカをマッコウクジラの下顎骨のすぐ隣に配置し、深海での両種の「対決」をイメージするイラストとともに展示した。

小項目 2-5(図 2I) は、カラチョウザメ *Acipenser sinensis* (全長 2.1m) とダウリアチョウザメ *Huso dauricus* (全長 1.7m) の乾燥標本(剥製)である。両種はいずれも昭和 30 年代に千葉県の内房地域で採集された個体である(川瀬・奥野, 2011 を参照)。

3つめの大項目は、「小さなモノ」である。ここでは前項目とは逆に、小型の標本や生体を展示した。海の博物館の 5 名の研究員が小項目を 1 つずつ担当し、それぞれの専門分野に関連する内容を紹介した。

小項目 3-1(図 2J) では、温帯域の勝浦沿岸に来遊する熱帯性魚類の例として、チョウチョウウオ類の生体を水槽で展示した。これまでに収集した資料を紹介するという展示の趣旨からすると標本を展示すべきところであるが、動きのない標本のみによる単調さを解消するために生体を使用した。

小項目 3-2(図 2K, L) では、成長しても数 mm にしか達しない微小貝の採集方法をパネルで紹介し、標本を展示した。微小貝は肉眼では形がわかりにくいいため、写真を配置するとともに、虫眼鏡や実体顕微鏡を通し

て実物を観察できるようにした。その中の一つミジンワダチガイ *Ammonicera japonica* (殻長 0.49mm) は、今回の展示物の中で最小の標本である。

小項目 3-3(図 2M) では、雌雄同体の動物の例としてヒラムシの一種の交尾する様子を動画で紹介するとともに、フジツボ類の乾燥標本やエボシガイ類の液浸標本を展示した。

小項目 3-4(図 2N) は、種を分類・記載するために使用されたアカホシカクレエビ *Ancylomenes speciosus* やティーズブラヤドカリ *Pylopaguropsis bellula* などのタイプ標本を紹介した。

小項目 3-5(図 2O) では、世界で唯一千葉県から報告されているオオノアナメ *Agarum oharaense* の押し葉標本や、絶滅危惧種が含まれているアマノリ類の培養株を展示した。

4つめの大項目は、「モノ」でないもの」である。海の博物館では、「モノ」ではなく電子情報である動画や写真も、標本と同様に一次資料として登録・保管しており(川瀬, 2008 を参照)、その一部を編集して公開した。

小項目 4-1(図 2P) では、これまでに房総半島各地で撮影した海中景観や海洋生物の動画資料を編集して、約 7 分間の映像「房総の海の自然と生きものたち」を大型スクリーンで連続上映を行った。

小項目 4-2(図 2Q) では、これまでに資料収集・調査研究の過程で撮影された標本写真や生態写真を 150cm × 90cm のポスター 2 枚に約 300 枚の写真を敷きつめて展示した。

広報の方法

海の博物館で企画展示を開催する際、その会期や概要を周知させるために様々なメディアを通して広報を行っている。広報の方法は毎回ほぼ同じであるが、規模は企画展の種類によって異なっている。今回の「大収蔵資料展」では、以下のような広報を行った。

広報メディアは、館独自のものと館外のものに大別できる。館独自のメディアとして、行事案内やちらしなどの配布印刷物、ポスターや横断幕などの掲示印刷物、ホームページやメールマガジンなどの電子情報が挙げられる。

行事案内(図 3A 左)は A6 切版・観音折り、両面カラーの印刷物で、年度当初に毎年発行している。これには海の博物館で 1 年間に開催される行事が掲載されており、その表紙を全面使用して「大収蔵資料展」の開催案内を掲示した。印刷部数は 8,000 枚で、近隣の観光・宿泊施設、近隣の小中学校や自治体、県内外の博物館関連施設、マスコミ等に配布したほか、館内に設置して来館者に配布した。

ちらし(図 3A 右)は A4、カラー・白黒の両面印

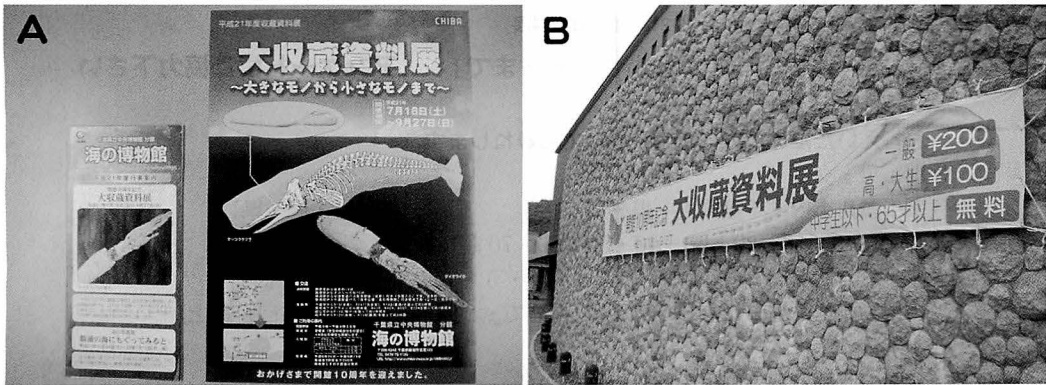


図3. 大収蔵資料展の広報に用いたちらしとしおり (A), 博物館の壁面に掲示した横断幕 (B).

刷物で、表面には展示タイトルと会期および利用の案内、裏面には展示の概要が記載されている。印刷部数は15,000部で、上記の配布先のほか、千葉県庁や県内教育機関の各部署にも配布した。

ポスターは、ちらしの表面の図案をA1サイズに拡大印刷し、約10枚を駐車場から博物館へつながる通路や展示室のロビーに掲示した。また、代表的な展示物を図案にした120cm×120cmのポスター4枚を、博物館から海岸へ向かう通路に掲示した。

横断幕は1m×9mの大きさで、企画展示が開催中であることを知らせる再利用が可能な汎用型と、展示タイトルや開催期間が表示されている使い切り型を用意した。前者は博物館へのアクセス経路となっている国道の歩道橋2カ所に設置し、後者は海の博物館の外壁に設置した(図3B)。

ホームページでは、企画展示を紹介するページの中で、他の印刷物より早く「大収蔵資料展」の概要を掲載し、ちらしの完成後にはpdfファイルをダウンロードできるようにした。

海の博物館のメールマガジンは定期購読制で毎月1回発行しており、「大収蔵資料展」の開催前と開催中に発行した号には、その概要と見どころを掲載した。

館外の広報メディアとして、新聞、雑誌、地方自治体の広報紙や、テレビ、ラジオなどが挙げられる。ただし、これらのメディアを有料で一定の枠を使用するのではなく、展示案内を各機関に送付したり、記者発表を通して展示概要を周知させて任意で取り上げられている。実際にどれだけの件数が掲載・報道されたのか、その全てを把握することは困難であるが、例えば千葉県の広報紙「県民だより」や地元情報誌「ぐるっと千葉」((有)ちばマガジン発行)、NHK千葉放送局のFMラジオ情報番組「ひるどき情報ちば」の中では、海の博物館で企画展示を開催する度に紹介されている。

アンケートとデータ解析方法

「大収蔵資料展」の開催中、展示を行っている研修室の出口前にアンケート用紙と筆記用具を設置し、来館者に任意で記入して回収箱へ投函してもらう形でアンケート調査を行った(図1, 図2R)。このアンケートでは、回答者自身の情報(性別、住所、年齢・学年、来館回数)、「大収蔵資料展」を知った情報源、展示のテーマ・わかり易さ・内容に関する評価、面白かった展示について質問するとともに、意見や要望等を自由に記入できるスペースを設けた(図4)。

アンケート用紙は毎日回収して日付ごとに綴じて保管し、「大収蔵資料展」の終了後に回答結果を集計した。アンケートの総回答数は889件であったが、不適切な回答33件(白紙または大半が白紙のもの11件、常設展示の感想が書かれていたもの11件、回答に明らかな矛盾があり悪戯書きと判断されたもの6件、1枚のアンケート用紙に複数人の回答がまとめて書かれてしまったもの4件、他施設の感想が書かれたもの1件)は除外して解析を行った。また、回答項目によって未回答や複数回答の場合があるため、母数は解析項目によって異なっている。

結果と考察

1. 回答者の住所・年齢・来館回数

「大収蔵資料展」のアンケート回答者自身の住所は、千葉県が41.8%と最も多く(地元の勝浦市は1.8%、市外は40.0%)、次いで東京都(23.8%)、埼玉県(14.0%)、神奈川県(11.4%)、茨城県(2.8%)、群馬県(2.1%)で、関東地方の都県で95%以上を占めた(図5)。県外からの来館者は58.2%で、海の博物館で平成18年度から20年度に冬季から春季にかけて開催されたマリンサイエンスギャラリーの回答結果(43.9%

千葉県立中央博物館分館海の博物館 平成 21 年度収蔵資料展

「大収蔵資料展一大きなモノから小さなモノまで」 アンケートにご協力下さい

Q 1 お答えいただいた方ご自身についてお尋ねします。

性別：男・女

住所：勝浦市内・千葉県内・県外（都・道・府・県）

年齢：(0・9・10・20・30・40・50・60・70 超) 歳代

学年：(小学生未満・小学 1・2・3・4・5・6 年生・中学生・高校生)

海の博物館へお越しになった回数：(初めて・2 回目・3 回目・4 回目以上)

Q 2 今回の収蔵資料展は何で知りましたか？

1. 博物館の行事予定表
2. 県民だより
3. 市町村の広報
4. ポスター・ちらし
5. ホームページ
6. テレビ
7. 雑誌（ ）
8. 来館して今日知った
9. その他（ ）

Q 3 今回の収蔵資料展のテーマは、いかがでしたか？

1. とても関心がある
2. やや関心がある
3. ふつう
4. あまり関心がない
5. 関心がない(理由：)

Q 4 展示のわかり易さは、いかがでしたか？

1. とてもわかり易い
2. ややわかり易い
3. ふつう
4. あまりわかり易くない
5. わかりにくい(理由：)

Q 5 展示の内容は、いかがでしたか？

1. とても面白い
2. やや面白い
3. ふつう
4. あまり面白くない
5. つまらない(理由：)

Q 6 面白かった展示、印象に残った展示がありましたら、教えて下さい。

展示タイトル： _____

理由： _____

その他、ご意見・ご要望等ございましたら、ご自由にお書き下さい(裏面もご利用下さい)。

ご協力どうもありがとうございました。

図 4. 大収蔵資料展の会場に設置したアンケート用紙。

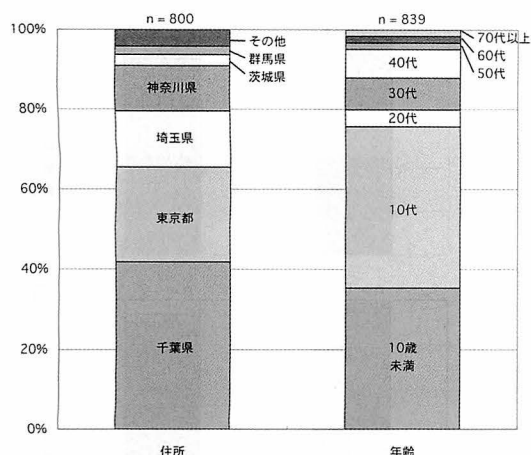


図5. 大収蔵資料展アンケート回答者の居住都道府県と年齢。

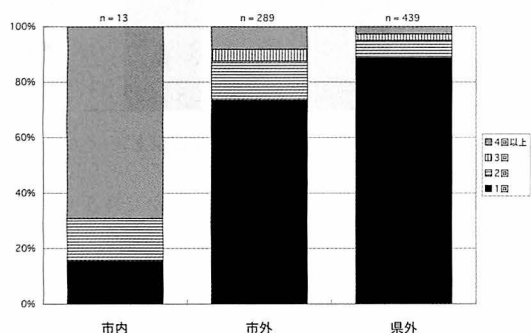


図6. 大収蔵資料展アンケート回答者の来館回数。

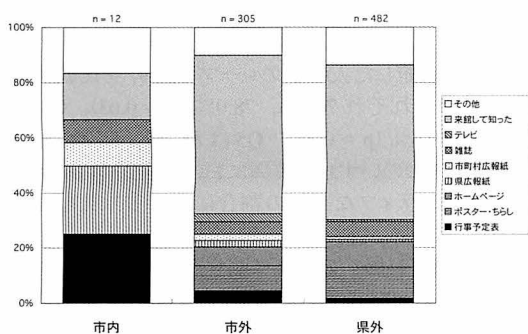


図7. 大収蔵資料展の開催を知るきっかけとなった情報媒体。

54.5%)より若干高かった。これらの値は、千葉市にある千葉県立中央博物館で開催された企画展示での回答結果(13.4%)(尾崎, 2001)と比較すると著しく高い割合となっている。勝浦市は南房総を代表する観光地で、海の博物館周辺は観光スポットの一つになっている。また、夏休みの期間には年間を通して最も多くの観光客が訪れる。これらのことが、県外からの来館者の比率を高めている要因になっていると考えられる。

回答者の年齢をみると、10歳代と10歳未満がおよそ4分の3を占め、次いで30代、40代が多くなっていった(図5)。年齢による回答率も考慮する必要があると思われるが、夏休み期間に多く見られた家族連れの来館者を反映していると考えられる。

海の博物館へ初めて来館したと答えた人の割合は、市内在住者15.4%、市外在住者73.4%、県外在住者88.6%であった(図6)。この結果から、海の博物館が地域博物館として地元の人に繰り返し利用される一方、観光スポットとしての役割を果たして多くの一見利用を生み出していることがうかがえる。

2. 「大収蔵資料展」を知った経緯

「大収蔵資料展」を知った経緯を尋ねたところ、来館して知ったと回答した人が全体の56.0%を占め、市外および県外からの来館者ではその割合が最も高かった(図7)。このように、「大収蔵資料展」の開催中であることを知らずに来館した人の割合が高い原因の一つとして、たまたま博物館の前を通りかかって入館した人が多いことが考えられる。海の博物館のすぐ近くには、昭和55年(1980年)から営業を開始して高い人気を誇っている千葉県勝浦海中公園センターの海中展望塔があり、これを目当てにして訪れる観光客の方が多い。海の博物館は自動車駐車場から海中展望塔へ歩いていく途中にあるが、入場者数は海中展望塔の63%(平成21年度)にとどまっている。入館者数をさらに増やすためには、海の博物館を目当てに来たのではない人に対して効果的なアピールを工夫する必要があると言えよう。

あらかじめ「大収蔵資料展」を知った経緯として、市外や県外からの来館者ではポスター・ちらしと、ホームページが多かった。配布エリアが限定されている行事予定表や自治体広報紙で知ったと答えた人は、市内や市外からの来館者が多かった。雑誌と回答した人は、月刊情報誌や旅行案内誌などを挙げていた。その他には、他の人に聞いた、学校の行事で来たなどの回答が含まれていた。

来館者が利用したメディアを、海の博物館が直接提供したメディアと館外のメディアに区分した場合、前者は21.5%、後者は10.1%であった。また、印刷物と電子情報に区分すると、それぞれ21.8%、9.9%であった。これらのことから、収蔵資料展を知るきっかけとなったメディアは印刷物の割合の方が高く、県内では各自

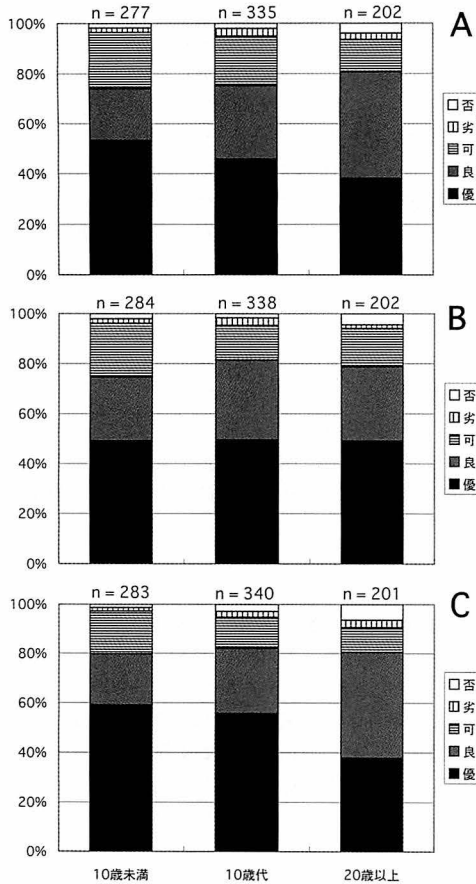


図8. 大収蔵資料展のテーマ (A), わかり易さ (B), 内容 (C) に対する年代別評価。5段階の評価 (図4) は、それぞれ「優」、「良」、「可」、「劣」、「否」として表示した。

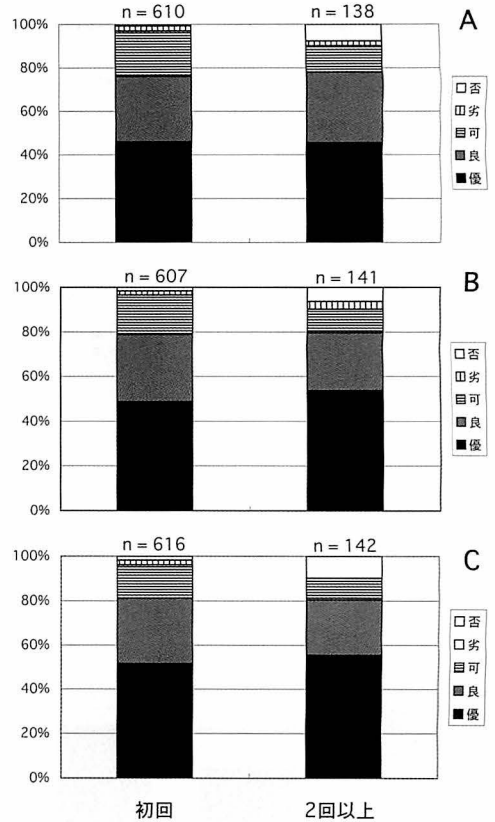


図9. 大収蔵資料展のテーマ (A), わかり易さ (B), 内容 (C) に対する来館回数別評価。5段階の評価は図8と同じ。

治体に提供した情報が広報紙に取り上げられて功を奏していることがうかがえる。その一方で、インターネット通信網が一般家庭に広く普及した今日において、ホームページが広報メディアとして必ずしも十分な役割を果たしているとは言えず、今後の広報戦略の中で再検討していく余地があると思われる。

3. 展示に対する評価

「大収蔵資料展」のテーマに対する関心度 (Q3), 展示の分かり易さ (Q4), 展示の内容 (Q5) の3つの質問に関する5段階の評価 (図4) を、10歳未満, 10歳代, 20歳以上の3グループで比較すると、Q3ではとても関心がある、またはやや関心があると答えた人の割合がそれぞれ74.0%, 75.2%, 80.7% (χ^2 乗検定, $p=0.21$), Q4ではとてもわかり易い、またはややわかり易いと答えた人の割合がそれぞれ74.6%, 81.4%,

78.7% ($p=0.13$), Q5ではとても面白い、またはやや面白いと答えた人の割合がそれぞれ79.9%, 82.1%, 80.6% ($p=0.78$) で、3つのいずれの質問においても年齢別のグループ間でポジティブな評価の割合に有意差はみられなかった (図8)。また、初めて来館した人と複数回来館した人の2グループ (図9) を比較すると、Q3はそれぞれ76.1%, 78.0% ($p=0.63$), Q4は78.9%, 79.6% ($p=0.86$), Q5は81.2%, 80.4% ($p=0.82$) で、3つのいずれの質問においても2つのグループ間でポジティブな評価の割合に有意差は見られなかった。

「大収蔵資料展」の評価に関する3つの質問に対して、いずれも80%前後のポジティブな評価が得られた。この値は、これまでに海の博物館で開催されたマリンサイエンスギャラリーとほぼ同じであった。

年齢別で評価を比較した場合、解説パネルの文章

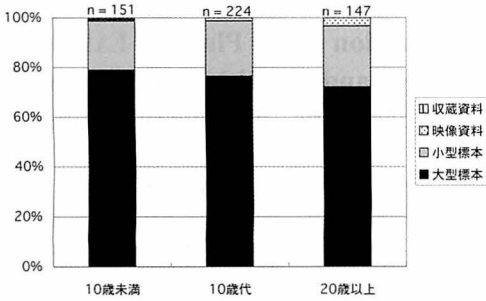


図 10. 大収蔵資料展で人気のあった展示テーマを含む 4 つの大項目の年代別割合。

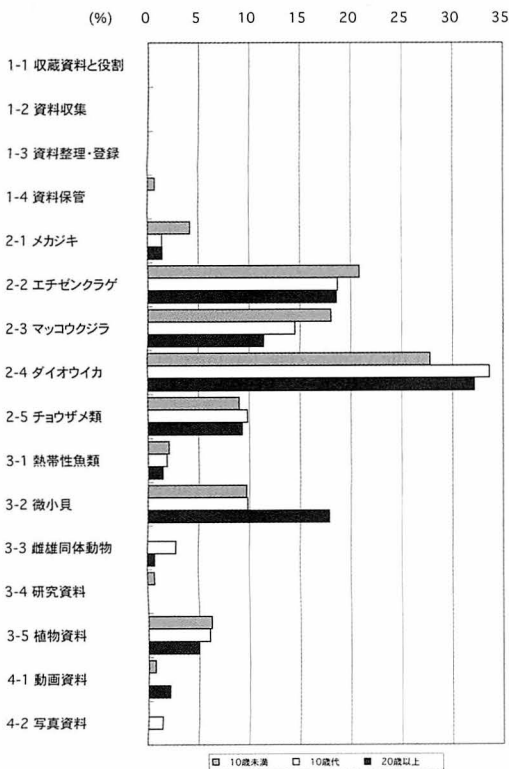


図 11. 大収蔵資料展で人気のあった展示テーマの年代別割合。

表現は一般向けでふりがなは少なめで小学生以下にはやや難しいことや、年齢による知識の量やこれまでの経験の差などから、それぞれの質問で何らかの差異があると予測していたが、有意な差はみられなかった。その原因の一つは、展示構成にあったのかもしれない。企画展示では、ふつう何らかのテーマに焦点を当てて

展示を展開するが、今回はこれまでに海の博物館で収集した代表的な資料をオムニバスの紹介する要素が強く、始めから通して展示を見ずに好きなところだけ見ても十分楽しめる構成になっていた。特に大型標本では、解説パネルが読めなくても実物だけで迫力があり、年齢を問わず高い評価の得られたことが考えられる。

来館回数別で評価を比較した場合、以前来館したことのある人が前回以上の展示内容を期待しているとするれば、その評価は厳しくなる可能性も考えられるが、初めての来館者と有意な差は認められなかった。博物館へのリピーターを維持・増加させていく上で、リピーターの評価が初来館者の評価を下回らないことが目安の一つになるかもしれない。

4. 人気のあった展示

面白かった展示、印象に残った展示タイトル (Q6) を、4 つの大項目 (表 1) で年齢別に比較すると、10 歳未満、10 歳代、20 歳以上のいずれの区分でも大型標本の人気は圧倒的に高かった (78.9%, 76.3%, 72.1%)。これに次いで小型標本に人気があり (19.9%, 22.3%, 24.5%)、収蔵資料または映像資料と答えた人はごくわずかであった (1.2%, 1.3%, 3.4%) (図 10)。

次に小項目 (表 1) を比較すると、いずれの年齢区分においてもダイオウイカの人気が最も高く、エチゼンクラゲがそれに続いた (図 11)。その理由を見ると、いずれも大きいことをあげる回答が大半を占めていた。3 番目から 5 番目は年齢区分によって順位が異なるが、いずれにおいてもマッコウクジラ、チョウザメ類、微小貝があげられた。マッコウクジラでは、大きいことをあげる回答が非常に多いが、チョウザメ類は格好良さをあげる回答が同程度あげられた。微小貝では、逆に小さいことを理由としてあげる回答が多数を占めていた。それ以外の展示では、きれいだった (熱帯性魚類)、新種が見られた (植物資料)、たくさんの魚が映っていた (動画資料) などさまざまな理由があげられていた。

人気が高かった上位 2 種は、いずれも最近話題になり知名度の高い動物であった。ダイオウイカは古くから深海生物の代表格として図鑑類に掲載され、最近では小笠原沖で生きたダイオウイカの捕獲に成功したという報道で知名度が一層上がった。エチゼンクラゲは、年によって日本海で大発生して漁業に深刻な被害をもたらすことがあるが、近年は北上したクラゲが津軽海峡を越えて太平洋側でもみられるようになった。展示を行った 2009 年の夏には、その冬に大発生する恐れのあることが度々報じられていた。しかし、このような大型生物の標本を見られる施設はごく限られており、一般の人が実物を目にする機会は非常に少ないはずである。本やテレビを通して見た大型生物の実物を初めて

見て、その大きさに驚いた人が多かったのではないかと考えられる。

展示標本の大きさではなく内容で比較的高い人気があったのは、海藻資料であった。ここでは、生きているアマノリ類の培養株を小さな容器に入れて展示したが、新種と考えられるものが含まれている点に興味を持った回答が多かった。

「モノでないもの」で紹介した映像は、標本からは知ることができない情報（体色変化や行動など）を備えており、資料的価値が非常に高い（川瀬, 2008）。しかし、映像自体は書籍やテレビなどを通して日常的に目にすることができるため、よほど珍しい映像か新しい視点で編集した映像でなければ高い評価を得るのは難しいかもしれない。ただし、展示全体として見た場合には、動物の動きやフィールドの音声があるビデオ映像によって、静的な標本が並ぶ単調さを解消する効果もあると考えられる。

謝 辞

今回開催した企画展示「大収蔵資料展-大きなモノから小さなモノまで」の会場で、アンケートにご協力くださった来館者の皆様のおかげで、広報と展示内容について客観的に評価することができた。また、査読者の方には、本稿を改訂するにあたり有益な助言を頂いた。以上の方々をはじめ、本稿をまとめる際にお世話になった方々に感謝する。

引用文献

- 川瀬裕司. 2008. 海洋生物の生態ビデオ映像の資料登録と活用-千葉県立中央博物館分館海の博物館の事例-. 日本生態学雑誌 58: 225-230.
- 川瀬裕司・奥野淳兒. 2011. 房総半島西岸から記録されたダウリアチョウザメ *Huso dauricus* とカラチョウザメ *Acipenser senensis* (硬骨魚綱: チョウザメ目). 千葉中央博自然誌研究報告特別号 (9): 107-112.
- 尾崎煙雄. 2001. 特別展入場者アンケートによる展示の評価. 千葉中央博自然誌研究報告 6: 209-223.

(2011 年 1 月 30 日受理)

Effects of Public Relations and Evaluation of the Planned Exhibition 'Large and Small Marine Organism Specimens' by Questionnaires

Hiroshi Kawase

Coastal Branch of Natural History Museum
and Institute, Chiba
123 Yoshio, Katsuura 299-5242, Japan
E-mail: kawase@chiba-muse.or.jp

The planned exhibition of our museum, dealing with various large and small marine organism specimens held in summer, 2009, was evaluated based on questionnaires collected from visitors. The major sources of media used by the respondents to find information on the exhibition were the museum web page, posters displayed on the wall of the passage to the museum, and leaflets distributed at nearby sightseeing facilities and hotels. However, it was revealed that more than half of the respondents found out about the exhibition just after entering the museum. Nearly 80% of the respondents provided positive evaluations on the theme, understandability and contents of the exhibition; the ratings had no correlation to the age or the visiting frequency of the visitors. The top three of the most popular exhibits were occupied with large specimens, such as giant squid *Architeuthis japonica*, Nomura's jellyfish *Nemopilema nomurai*, and a jaw of a sperm whale *Physeter macrocephalus*; respondents liked these exhibits mostly because of the large size of the real specimens.